

帰国者の裁判を考える会

東京都港区新橋2・8・16 新橋石田ビル4階 救援連絡センター 気付 電話 03(3591)1301  
郵便振替 東京00280-9-427553 「帰国者の裁判を考える会」 定価200円(送料72円) 年12回分3000円

# ザ・パスポート



1994年10月21日発行

45

# 「カルロス」報道のデタラメ・ 反帝勢力と帝国主義との地下戦争の実態

94.8.30 丸岡 修

## ★ カルロス（イリッチ＝ラミレス＝サンチェス）氏逮捕の真相

- 先日、フランスDST（海外領土監視局とかが正式名称。仏が植民地支配のために作った治安弾圧の情報機関＝秘密警察）にカルロス氏がスーダンで逮捕されたと大きなニュースになっていました。おまけに「日本赤軍と関連云々」のデマもつけて。DSTは、アルジェリアやベトナムなどで無差別逮捕、拷問、暗殺などをやってきた悪名高き機関。
- 「カルロスと日本赤軍は連携」という報道は悪質なデマ。カルロス派と日本赤軍は路線に大きな違いがあるし、カルロス派はPFLP（パレスチナ解放人民戦線）とも組織的関係を一切持っていない。 「連携」とするならカルロス派はPLO全組織と「連携」しています。日本赤軍とは組織的関係どころか連携もありません。ここでは敵前になるので書きませんが、批判はあります。しかし、帝国主義陣営とその御用マスコミによる「国際テロリスト」キャンペーンには断固として反対し、カルロス氏を擁護します。帝国主義者共は常に、反帝で闘う勢力、民族解放を求める勢力を「国際テロ」と非難し、己らの侵略行為を「民主主義の闘い」と称し、金で雇ったテロリスト共を「フリーダム・ファイター（自由の戦士）」と称しています。自らの情報機関を動員して、要人の暗殺、施設の破壊、合法政権の転覆までやっています。米国CIAやイスラエル・モサドの国家テロ（これこそ国家テロなのだ！）は、ここに書くまでもなく内部暴露の出版物が多く出ているので省略します。フランスによるテロは、80年代にニュージーランドの港に停泊中のグリーンピースの船「虹の戦士」号を爆破して沈め、1名を殺害したことに例を見ることができます。仏軍の特殊工作員（テロ要員）の仕業であったことは仏政府自体が認めています。話を戻します。カルロス派は完全な独立組織です。PFLPの一部でも何でもありません。「日本赤軍と関係がある」とする報道の根拠は、1974年9月の日本赤軍による在ハーグ・フランス大使館占拠闘争にカルロス氏がかんでいたとする仏当局の発表によっています。その情報源は、1975年に射殺されることになるイスラエルのスパイだったレバノン人・ムカベルという男です。この男はDSTに逮捕された形をとってカルロス氏のパリのアシトにDST要員を案内したところで逆にカルロスとされた人に捜査官ごと射殺されました。この男の「自供」に「日本赤軍のハーグ事件に関与」とあったことによっています。仏当局がそう言っているに過ぎないものです。日本の新聞はそれに己らの勝手な推測をつけ加えてストーリーを作っています。ちなみにこのムカベルというスパイによって、何人ものアラブ人活動家がヨーロッパでイスラエル・モサドに暗殺されました。

● 「逮捕」の真相。マスコミ報道ではスーダン警察とDSTの共同作戦とありましたが、実際にはDSTが直接に乗り込み誘拐したはずです。弁護人が主張している通りに。イスラエルが旧ナチス戦犯アイヒマンをアルゼンチンから極秘に誘拐したことを思い出して下さい（アルゼンチン政府が引渡しを拒否したり、西ドイツに強制送還するのを恐れて拉致したもの）。やることが野蛮な米国によるパナマからのノリエガ将軍拉致（派手な侵略戦争を行い、おまけに親米政権まで樹立）と似たようなものです。相手国政府に正式な「引き渡し」要請で拒否される可能性がある時、欧米帝国主義とシオニスト・イスラエルは平気でこういうことをします。10年以上も前に、旧西ドイツの特殊舞台がブルガリアに旅行者として居たドイツ赤軍派の数名の滞在ホテルを奇襲し、そのまま空港で待機していた民間航空ルフトハンザ機（西独の国営企業。民営化前の日航のようなもの）に西独大使館の車で乗りつけ（外交特権がある）国外に移送。機が西独領に入ってから西独政府がブルガリア政府に「逮捕協力に感謝する」と発表。主権侵害もはなはだしいけれども、相手国にすれば外交関係維持が大事なので文句を言えないのです。韓国（南朝鮮）が日本からキム・テジュン（金大中）氏を拉致した事件を思い出して下さい。なぜ旧西独がこういうことをしたかと言うと、旧ユーゴスラヴィアで秘密会合していたドイツ赤軍派4名の身柄拘束と強制送還を西独政府がユーゴ政府に申し入れたところ、ユーゴ政府はこの4名を国外退去処分にしたところがあったので（西独にいたユーゴ人右翼テロ容疑者数名の送還を西独が拒否したこともあり）。国外退去=強制送還ではありません（こんなことをするのは日本だけ！）。欧州では第三国への追放でその国に48時間は通告しません。米軍戦闘機がエジプト航空機をハイジャックしてイタリアに強制着陸させ、パレスチナ解放組織指導者のアッバース氏を拉致しようとしたが、主権を侵害されたイタリア政府が怒り（伊国防相が首相に無断で米国に協力）、アッバース氏を国外退去させたことがあります（氏は旧ユーゴに追放されチュニジアに無事帰還）。伊はNATO加盟国であり米国の同盟国ですが、これが主権国家のあり方です。話は飛びましたが、「自由と民主主義」を自称する人々の本質は米国、独、仏などの行動を見ればよく分かります。日本のマスコミは無知なのか馬鹿なのかそれとも意図的なのか、真実を報道していません。

● 新聞のウソ。朝日新聞は英國大衆紙『ヨーロピアン』の記事を8.19付の夕刊第2面に持ってきて「カルロスはシリアに密告された」と書いていました。日本の新聞は一貫して、「カルロスはアラブ諸国ではPLOとイスラエル和平協定後に邪魔者になった」と書いています（ついでに「日本赤軍も同様」などと）。その画一的描き方（ステレオタイプ化）の一つが上記のような記事になります。カルロス氏がどの国と関係があったかは知りませんが、「シリアに密告された」というのはデマでしょう（おそらくスーダンも仏には協力してなかつたはずで「外交的压力」という脅迫を受けたはず）。英・仏のマスコミの多くはユダヤ資本だし、『ヨーロピアン』は『夕刊フジ』や『東京スポーツ』のような新聞です。朝日はその類の記事を『情報』と言う。日本のマスコミのレベルはこの程度です。

● 愚にもつかない朝日のゴロ記事。8.29付朝刊第4面「ミニ時評」に中東アフリカ

総局長の荒田茂夫は、「居場所を失う日本赤軍。中東はカルロスや日本赤軍など古いタイプのテロリストをもう必要としなくなっている。レバノンのパレスチナキャンプにいるとみられる日本赤軍は、シリアを含めた包括和平が実現すれば、居場所が中東に残らない」というようなことを書いています。この男は我々の出版物を読んだことも、アラブの新聞も自分の目では読んだこともないはず。イスラエル・モサドもこの記事を読んで日本のマスコミのレベルの低さにあきれていることでしょう。まず、日本赤軍はカルロス派とは全く立場を異にしています。第二に、日本赤軍はいかなる組織や国家のヒモつきになったことはないし荒田の考えるようなパレスチナ革命の主体でもないので「代理闘争」はない。第三に、日本赤軍はイスラエルとの単独和平を批判しているが包括和平には反対していないし、P L O やアラブ諸国の決定に干渉もしない。包括和平が実現し、イスラエルがすべての占領地を放棄しパレスチナ建国を認めるのであれば、大歓迎という立場です。大体、日本のマスコミと言うのは、ピョンヤンに行って朝鮮（民主主義人民共和国）のことを書くのではなく、敵対中の韓国のソウルで集めた情報で記事を書いています。中東問題でも同じように「西側情報」だけで記事を書いています。「湾岸戦争」の時には、交戦国である米国のC N N やB B C でさえ特派員をイラクのバグダットに残して「客観報道」を心がけたのに対し、日本のマスコミはすべて逃げ去り（朝日はイラク人ジャーナリストを使うという卑怯なやり方）、多国籍軍司令部情報の横流し。この調子で、中東では「過激派は孤立」として描いておけば良い、という安易な取材姿勢では「客観報道」はできません。「ジャーナリズム」と自稱せず、「日本政府私設広報部」、「米国国務省広報部」とでも名乗ったらどうか。

● 「カルロス暗殺計画」。カルロス氏の弁護人が公表し、仏政府は否定していたけれども、8. 26、80年代前半にD S T局長をやっていたイブ=ボネはロイター通信に、暗殺計画があったことを認めています。「このような秘密作戦は多くの国で行われている。民主国家でもたまには法を無視することが最良の選択となることがある」。「（逮捕、裁判などの）法的な手続きを待ってヒトラーを抹殺する機会を失ってしまってはいけない」改めて説明することもないでしょう。

● 「カルロス逮捕」で困る者。日本の新聞は、「カルロスが自供すれば、アラブ諸国は困る。仏当局は外交の武器にするために公表しないだろう」と書いていますが、実は一番困るのは、保守の前大統領のジスカールデスタンと（ミッテラン政権下）元首相のシラクであり、そして社会党の現大統領のミッテランと元首相のファビウスでしょう。カルロス氏逮捕は、仏政府にとって両刃の剣のはずです。

● 最後に、仏での拷問について。映画『ジャッカルの日』では拷問場面があります。『アルジェの戦い』においても。現在、仏も建前では禁止にしていますが、秘密裡に逮捕されるとあります。1974年に日本赤軍の同志1名がD S Tに逮捕され、ラ・サンテ拘置所（日本の新聞には刑務所と拘置所の区別ができる。ラ・サンテに恐らく両施設があるはず）に放り込まれました。そこで当局に警告されたのは、「仏では拷問できないので米国F B I の車に来てもらってその中でやる（彼が百枚ほどのニセ百米ドル札を所持してい

たとされ——事実か否か私は知らない)、覚悟しておけ」でした。〈余談。ある日、この同志が所長室に呼ばれて行くと機器を設置していたので拷問かと思ったところ、在ハーグの仏大使館の同志たちからの電話を受けるためであつたらしい。ハハハ。さて、ついでに拘置所内の様子。自炊ができた。オイル・サルディン(いわし)の缶詰の残りの油で燈火を作つたらしいから、タバコ、マッチも自由所持。ただし、同房者から「お前、アラブ関係で捕まつたらしいけど、中では黙っていた方がいい。ニセ札所持を疑われているとしておけ。この中はユダヤ人グループが握っているから気をつけろ」と注意されたそうです。彼は、取調べ期間中にもかかわらずレバノンの公然住所に手紙を書くことさえ許可されていました。日本よりはるかに「良い」。〉

## ○ 補足 94. 9. 20

### 1. カルロス氏弁護人の話から

カルロス氏の弁護人が9月3日、「スーダンで8月15日に逮捕されたカルロス氏がフランス当局に引き渡された経過は誘拐・監禁などにあたる」と告訴していたことを明らかにした、と新聞の特派員記事にありました(9/朝日4朝刊)。弁護人によれば、「カルロス氏は8月13日にハルツーム市内の病院で手術を受けた後、警護の係官らに市中心部を離れた建物に移された。14日夜、警備員が襲いかかって手銃をかけ、頭にズキンがかぶせられた。軍医の注射で気絶し、担架で空港に運ばれた。カルロス氏はもう一枚のズキンをかぶされ、遺体のように袋に入れられて革ひもで縛られた。飛行機はパリ郊外のビクラーブレイ空港に到着。15日午前10時半すぎ、DSTに運ばれてから初めて、逮捕状を執行された」とのことです。

これによれば、カルロス氏誘拐にスーダン当局者の一部も関与していたことになります。いずれにせよ、仏政府が圧力をかけて非合法の誘拐をやったことに間違いはありません。スーダン政府が完全に仏への協力に合意していたのなら、このような逮捕劇は必要なかったはずです。強い大国が弱い小国を脅かしつけて、やりたい放題のことをやる、これが帝国主義のやり方です。

### 2. 日本のマスコミ用語はおかしい

朝日新聞は、仏の治安機関DSTを「国土監視局」と訳しています。Tは英語ではTerritoryにあたるものだったと思います。フランス語の正式名称をはっきりと覚えていませんが、そのはずです。テリトリーなら「国土」と訳すよりも「領土」の訳がふさわしく、DSTの役割は正に、仏の海外領土支配のために設立された秘密警察です。つまり「国土監視局」ではなく、「(海外)領土監視局」です。通常のDSTの活動は、仏の植民地や権益国での反仏勢力に対する監視:情報収集:弾圧であり、二つには国内在住外国人に対する監視:情報収集:弾圧であり、三つには反仏闘争を行うすべての運動・組織に対する情報収集:破壊工作です。日本人にわかりやすく言えば、旧日本軍の特務機関+現在の警察庁警備局公安部外事課のような治安弾圧組織を連想すれば、それがDSTです。

## 弁護人F先生への手紙

94.9 泉水 博

F先生へ  
残暑お見舞い申し上げます。

今夏は、各地で記録的な猛暑が続き、そちらでも例外ではなかった様ですね。その後も先生には、お変わりなくお過ごしのことと推察いたしております。暑さには強いと自負しておりました小生ですが、この夏の暑さにはまいりました。とにかくよく汗をかきました。○体重が15キロ減ってくれたのでかえって現在は体調良好です。尤も運動不足で増えた体重ですから、この環境の中ではじきに増えてしまうことでしょうが……。

先生からのお便り、8月15日に落手いたしました。何時もご多忙の処をお手数をかけ申し訳ありません。どうもありがとうございます。

ご存じの通り小生、相変わらず同志丸岡には、文字通りおんぶにだっこで何時も心労をわざらわせております。誠にありがたくも、甚だ恐縮いたしめる次第です。同志には控訴審の弁護士も決まったよし、先ずは何よりと安心し、喜んでおります。同志も益々多忙をきわめていることでしょう。小生、何の力にもなり得ず残念かつ申し訳ないのですが、唯々、健康を維持して頑張ってほしいと念じております。どうぞ先生から、よろしくお伝えいただけましたら幸甚です。

抑て、お問い合わせの件について以下に記します。

- ① 書籍リスト中に『日本赤軍20年の軌跡』を書き残しました。どうもすみません。昨年7/22にM先生より差入れいただき所持いたしております。そして『ペイルート82年夏』と『永田洋子さんへの手紙』については、差入れていただいてません。念の為、領置に問い合わせ確認しましたが、記録にもないとのことでした。
- ② X様からのカンパは、またY先生を通じて7/7に1万円の送金差入れをいただきました。何時も誠に有りがたく深く感謝いたしております。X様のご高齢でのご活躍の程を思うにつけ、小生のだらしなさと今後の責任ある生き方が問われおることを、より一層自覚させられおる次第です。機会がございましたら、どうぞ、呉々もよろしくお伝えいただきたく思います。
- ③ 『豊臣秀吉』はH氏より差入れいただき、9/2に落手いたしました。ありがとうございます。現在、3冊が手元に届き、あとは領置されています（一応、1カ月3冊までが規定のため）。
- ④ 『怒りていう、逃亡には非ず』は再版になったよし、斯くも多くの人達に、真実・真相を認識していただいていることを思うと、唯々、大変にありがたく、かつうれしい限りです。松下先生にも改めて感謝いたしたり、お礼を申し述べたい気持でいっぱいです。小生のこの心の内を、おついでの折にもどうぞ呉々もよろしくお伝えいただきたいと思います。

尚、同封別紙1、2にその後に差入れていただいた書籍、パンフ等を記しました。そして、『ザ・パスポート』の42号が差入れていただいてないので、在庫がありましたらお願ひしたいと思います。ご連絡のほど頼みます。

なおまた、『〇〇〇〇〇』は、係の方から直接、郵送差入れをいたしておりますので、その旨、H氏へお伝え下さい。H氏にも何時もお世話になりっぱなしで、お礼も言えず、心苦しく思っております。どうぞよろしくお伝え下さい。加えて毎度、差入れを始め、ご支援、ご援助をいただいている諸兄姉の皆様にも、機会がありました折にもよろしくお伝えいただきたく存じます。

甚だ勝手ばかりを言って申し訳ありません。どうぞ寛恕のほどを願い上げます。

更に、前回記しました同志への返本等の宅下げを6/7にY先生宛に手続きしました。先生のおついでの折にも受け出し及び差入れていただくこと、お願ひしてありますのでよろしくご了承下さい。

残暑もようやく峠を越した様です。これからは、日一日と秋の気配の色濃くしてまいりましょう。

気候の変わり目はとかく風邪などひき易いとか申します。先生にはどうぞ、吳々もご自愛下さい。

ご健勝で益々のご活躍を念じております。

先ずはご連絡まで。乱筆乱文お許し下さい。

1994年9月5日

泉水 博 拝

#### <丸岡から本誌読者への補足説明>

- ① 泉水同志は私に「おんぶにだっこ」と書いていますが、私は何もしていないので私の方こそ申し訳なく思っています。弁護団にこそ私たちはおんぶにだっこで恐縮至極です。泉水同志には私に気遣うことなくのんびりやってほしい。
- ② 彼の手紙で初めて知ったのですが、彼には1ヶ月3冊までしか読むことを許されないようです。「受刑者」に対するこのような規制は人権侵害以外の何物でもありません。新聞の講読も許可されず当局が回覧する読売新聞しか読むことができません。それも著しく限られた時間で。（未決の私には差入れ数制限はない）
- ③ 『怒りていう、逃亡には非ず』の初版発行数は1万冊と聞いています。昨年12月新刊で、春に再版。未読の方はどうぞ。松下竜一氏著、河出書房新社、1500円。
- ④ 泉水同志に渡っていないという『ザ・パスポート』42号は、泉水同志から弁護人に宛てた手紙を掲載してあるものです。
- ⑤ 泉水同志への激励などは、考える会か檜森孝雄氏（〒242 神奈川県大和市大和東3-3-7 大矢アパート201号）。手紙文は直接に泉水同志に話しかける文体だとそのコピーの交付を東拘当局に止められます。弁護団や考える会への文章に撤して下さい。本誌への投稿歓迎。尚、泉水同志への印刷物送付は 〒124 東京都葛飾区小菅1-35-1 東京拘置所に。

丸岡 修 (94. 9. 15)

# 受領物

94.9.5

泉水 博

3. 30、救援299号。4. 1、話の特集5月号。4. 4、解放570号、ごましお通信14号、新左翼運動—獄中書簡集。4. 5、支援連ニュース140号、死刑廃止の会報165号。4. 7、キタコブシ51号4. 12、やってない俺を目撃できるか72号。4. 14、噂の真相5月号、蜂起269号。4. 18、解放571号。5. 2、話の特集6月号。5. 6、支援連ニュース141号、救援300号、解放572号。5. 9、人民革命№22、ザパスポート41号。5. 11、噂の真相6月号。5. 16、蜂起270号。5. 18、解放573号、原詩人通信56号。5. 19、ごましお通信15号、死刑廃止の会報166号、森を守る会集会ビラ。5. 25、やってない俺……73号、Don't Kill-94年コンサートビラ。5. 31、話の特集7月号、支援連ニュース142号、救援301号。6. 6、解放574号。6. 8、キタコブシ52号。6. 14、蜂起271号、噂の真相7月号。6. 17、解放575号。6. 22、ごましお通信16号。6. 23、死魔会報167号。6. 24、麦の会通信76号、日雇全協ニュース79号。6. 27、救援302号。6. 28、やってない俺……74号。6. 30、リッダ闘争22周年5. 30声明、中東レポート№86~95・100号、話の特集8月号。7. 5、解放576号、支援連ニュース143号。7. 11、言いたい放題47~49号、悪党通信21~24号。7. 12、やってない俺……75号、噂の真相8月号。7. 14、解放577号、蜂起272号。7. 19、ザパス43号。7. 26、原詩人通信57号。7. 29、救援303号、話の特集9月号。8. 3、解放578号、支援連ニュース144号。8. 4、やってない俺……76号、94全救交へのアピール要請ビラと葉書(QCより)。8. 5、キタコブシ53号。8. 12、噂の真相9月号。8. 16、蜂起273号、解放579号、中東レポート№98~100、悪党通信24号。8. 30、ごましお通信17号。9. 1、死魔会報168号、話の特集10月号。9. 2、豊臣秀吉1~8巻、言いたい放題50号。

以上、その後、差入れいただいた書籍、パンフです。

どうもありがとうございます。

**追伸** 前回お約束した作業関係の報告については次回にさせていただきました。要請はしたもののはりらちがあかず、現状変化は無理でした。

[丸岡から読者の皆さんへ； 同志泉水には印刷物の送付が可能です。手紙は東拘に不許可にされます。差出人の住所・氏名が必要です。東拘当局から問い合わせが来る場合もあります（形式的なもの）。宅下げは許可されないので返却の必要なものは避けて下さい。]

丸岡宛手紙

## 八月十五日 前後

青く晴れあがった空の下で余念なく畠の草むしりをしているとき、東の方角に地を圧するような重い金属音がきこえ、見上げると団体の大きな飛行機が7~8機、山峠に展けたこの小さな平野にむかっている。

しんかんとした白日の昼下り、畠に人かけはなく、動くものといえば私ぐらいのものであろう。

飛行機の機種や、国籍にはまるで昏い私だが、制空権はすでにアメリカに握られていて、多くの都市が爆弾に晒されている現状をかんがえると、これはてっきりB29、ととっさに身構えたが、あたりは遙るものなに一つない川べりの畠、息をつめてしゃがんでいると、編隊は銃の轟音をのこして西の方へとび去った。

ときどき一機か二機、迷いこんだように上空にあらわれることがあっても、今日のように不気味な飛来ははじめてである。

昨夜おそらく、山脈をこえて丹後の方向からにぶく重い音の震動が断続的に伝わってきて、軍港の舞鶴が爆撃されていることは承知できていたのだが。

翌15日の朝、町内に触れがまわって、今日の正午、天皇の重大発言が放送されるから町会長宅にあつまるように伝達された。

徹底的な坑戦か、それとも降伏の“詔勅”か、さまざまな憶測のなかに正午、雑音のはげしいラジオから、呪文とも祝詞ともつかぬ人間ばなれした声が断片的に流れてきて、意味不明瞭ながらとにかく戦争がおわったことだけは理解できた。

50年後のいま、その日のことを回想してみるのだが、この一瞬を興奮したり、慟哭したりの場面は、まったく記憶にない。重くるしいものから解放された安堵感があたりを支配していたようにおもう。

家のまえの川で洗いものをしているとき、日ざかりを帰ってきた道のむかい側の青年が、鉄道のくろい制服を肩からはずし、縁側に叩きつけたきつけ、「畜生！畜生！」と号泣していたことがなんとも奇異に感じられた位だ。

電燈の覆いも除いた。“非国民”的家族への風当たりの強い在郷軍人もいて、他処以上に灯りの制限もきびしく、そのため私はまえの川におち、今に残る傷あとを脛にもつ。

私の家族はなにを食べていたのだろう。

砂糖、大豆等のわずかな配給のほかは、麦ぬか、芋の蔓のたぐいで弁当もまともに持てない子供たちは、学校勤員の山仕事のノルマがこなせず、学校をさぼるようになり、私は赤ん坊を背負って、山頂の松の根、谷底の藤のねっここの掘りおこしに狩りだされて「忠君

愛國」に固まっている、おとなしい町内会長の小言に耐えねばならなかった。

伝手を頼って出かけた隣村でも、あれだけ。おとらかだった故郷の人々からけんもほろろの扱いをうける始末。

分校の生徒たちが物々交換で手に入れた上質のサージの制服をきて校庭を走りまわっているのが、なんとも奇妙な風景に映った。

東京からの送金がとだえがちになり、ぼんやり浮かぬ顔をしていると、実家の兄が、夜、そっと当時貴重だった味噌を運んでくれることもあった。

調味料が極度に不足していた。村の人は一升瓶をさげ、争って殺人列車にのり、日本海まで汐汲みにでかけるのが仕事の一つになってきていた。

よる、表にけたたましい音がして怖ろしさに息を殺していると、思いがけなく東京に残っているはずの私の相棒が、大きなりュック如戸口から入ってきた。もの凄い音は物干竿と目鏡がぶつかって落ちた音であった。

東京に広島なみの爆弾がおちる、ときいて逃げてくる途中で敗戦を知ったのだという。

翌々日の朝、町内会長がやってきて、

「お宅のご主人がみえているそうですが、これから日本の日本がどうなるか、町内のものにご意見をきかせてやって頂きたい」

相棒は町会に顔もださずその日のうちに引き上げていったが、その変わり身のはやさには嘆然とする他なかった。

つくづくおもう。又とないあの変革の好機に、なぜこの国は旧い体制と戦争責任の追求をうやむやにしてしまったのだろうか、と。

天皇を象徴として残したからこそ今日の日本の繁栄がある、と天皇制を否定する左翼のあいだにもこの信仰は根強い。本当にそうであろうか。

日本の占領に天皇を利用したマッカーサーに誤算があった、と私はずっと考えていく。

日本人の『特殊性』とはすばらしい“民族性”なんていうわけのわからないものではなく、盲目的な奴隸性のことだ。この習性は明日の主人に忠誠を誓う間に一つ心の呵責を感じたりはしない。

マッカーサーの判断に錯覚を与えたものは、策略をもって千余年を生きのびてきた天皇と天皇周辺の頭のよさであったと考えるのは私一人であろうか。

一年たって疎開さきから引き上げてきた私が沿道にみたものは、瓦礫と化した建物の残骸であったが、東京に入って廃墟のむこうにまっさきに見えたものは、遮るものすべてを失った品川の沖で、海岸のまばらな松原が、東海道五十三次の浮世絵そっくりの風景であったことが、いまも脳裡にあたらしい。

# 監獄ずーむあっぷ

94. 8. 4

(東拘不当在監) 丸岡 修

## 米国からの人権活動家たちとの面会てん末（東拘事情）

7月下旬、米国の民間人権擁護団体の Human Rights Watch/Asia（人権監視“委員会”〔勝手訳〕／アジア）の人たちの面会がありました。その時のてん末を紹介しておきましょう。

6月下旬に来日予定を聞き、米国（アメリカ合衆国）ワシントンの事務所に面会依頼の手紙を出しました。英語の手紙を出そうとして東拘当局に英語使用の「許可願」を出したところ、即日に不許可「取り扱わない」との回答。やむをえず日本語による手紙に切り替えました。相手に何語の手紙かわからないのでは翻訳不可能だし、なぜ英語を使わないのでかと疑問に思うので、手紙の最上部に「英語による手紙を当局が許可しません」と英文・和文で記載しました。すると、発信は許可されたものの、「前後のいきさつから今回は一行の英語使用を認めるが、前例とはしない。尚、英文1行使用許可願を提出すように」と当局から条件をつけられました。東拘は、「英文手紙コピー交付不許可」に対する永田洋子氏ら提訴の国賠訴訟において「高校程度の英語であれば、翻訳料の自己負担なしの交付は可能」というような回答をしているが（実際は許可しない）、たった一行の英語は中学校程度のものであるのに「許可願」をわざわざ書かせます。何ともはや。

さて、次は肝心の面会。7月中旬に面会通知があり、当日の朝、面会時の英語使用許可を問い合わせました。以前に2度、外国人の面会が日本人と共にあり、その日本人が通訳をすることになったのですが、何と当局はその外国人と日本人の外国語による会話（イタリア語、英語）まで禁止にしてしまい、外国人に一言も喋らせないようにしてしまいました。日本人と私とで日本語で話すしかないのですが、肝心の面会にきた外国人本人たちには話の内容を説明することもできず、顔を見合わせるしかありませんでした。初回面会の当初5分間ほどは私とは禁止されたものの面会者どうしの外国語会話はできていました。ところが突然に中断させられ引き離されました。立会い看守が幹部職員に問い合わせ、「丸岡が面会者同士の外国語会話を聞いているのに、立会い看守がその意味を理解できないので通訳との外国語会話を禁止する」とされました。その結果、上記のようになったのです。「英語使用の許可を求めたらいいのか」と2回目の後に聞くと、「そうしてくれ。許可されるかどうか自分にはわからないが。日本人（被）収容者に日本語を話せない外国人が面会に来る例は今までほとんどなかったので。親族の場合は許可されている」ということでした。それで今日問い合わせたのです。11時半になってから「外国人の面会がある。英語使用が許可されるようだから、すぐ許可願いを書いてくれ」と通知。予想に反して許可だったので私の方がびっくり。あわてて申請し当局の手続き終わって面会室に入ったのが11時55分！ 看守は正午までと言う。仕方ない、「延長願」を出せなかつたが5分でもと始めたところ、弁護人面会でも正午で打ち切るのに、何と12時15分過ぎまで。「外圧」もいいものです。しかし、困ったことが1つ。7年近い拘禁で私が英語を忘れてしまっていた！（笑）————これは『監獄通信』50号から転載————



## \*注釋\*

丸岡修

掲載の塗は、大阪拘置所在  
監の中村好男さん(50)

から寄せられたものです。  
(94年9月)

中村さんは「監獄取締  
官違反(拒捕)」でテッサ  
アゲ運転され、一審の京都

地裁では「懲役6年、罰金  
百石四」の不当判決。大筋

訴訟でも有罪とされ、この  
9月に最高院からも上告棄

却に退いてしまいました。

無念の下獄になります。残  
刑は3年数ヶ月。元気さ。

後は、某組の組長であるた  
ため警察に狙われ、監視搜

査、違法逮捕でやらかされた  
のです。

(94.10.10記)

## ★『怒りて言う、逃亡には非ず』

日本赤軍コマンド暴行博の流転  
松下竜一氏著 / 河出書房新社

93年12月刊  
1500円(税込)  
通料 310円  
〒151 東京都渋谷区千駄ヶ谷2-32-2  
郵便番号: 00100-7-10802

## ★『日本赤軍20年の軌跡』

日本赤軍20年間の公表文の集大成  
日本赤軍・編著 / 話の特集

93年5月刊  
4944円(税込)  
通料 380円  
〒151 東京都渋谷区千駄ヶ谷3-2-10  
郵便番号: 東京8-90714

## ★『公安警察ナンボのもんじゃ』

丸岡修の被逮捕時取調べペトキュメント  
丸岡修著 / 新泉社

90年10月刊  
1648円(税込)  
通料 310円  
〒113 東京都文京区本郷2-5-12  
郵便番号: 東京7-160936

## ★『月刊中東レポート』

日本赤軍編集 / ウニタ書舗

通巻100号(94年5月)で休刊 85年創刊  
1~50号、51~100号の合本、各5万円で発売中  
〒101 東京都千代田区神田神保町1-521